

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | プレイヤーヌマーンラーチャトンの生涯  |
| Author(s)     | 吉川, 利治  |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 24 p.57-p.67   |
| Issue Date    | 1971-03-30  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80399">https://hdl.handle.net/11094/80399</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# プラヤーアヌมานーラーチャトンの生涯

吉 川 利 治

## ชีวิตของพระยาอนมานราชชน

สรุป

ศาสตราจารย์พระยาอนมานราชชนเป็นลูกจีนเกิดในกรุงเทพฯ หลังจากได้รับการศึกษาขั้นต้นแล้วก็ได้เข้ารับราชการที่กรมศุลกากรจนถึงอายุ ๔๖ ปี ในระหว่างนั้นท่านสนใจในด้านศาสนาและได้แปลหนังสือกับ"นาคะประทีป"โดยใช้นามปากกา"เสฐียรโกเศศ"ต่อมาเมื่อได้รับตำแหน่งในกรมศิลปากรแล้ว ก็สนใจในด้านประวัติศาสตร์ไทยและด้านภาษาโดยเฉพาะภาษาไทยกับภาษาจีน เคยเป็นผู้บรรยายวิชาประวัติศาสตร์ในคณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัยเป็นคนแรกในประเทศไทย เมื่อสมัยจอมพล ป.พิบูลสงครามเป็นนายกรัฐมนตรี ท่านได้รับแต่งตั้งให้เป็นผู้เชี่ยวชาญประจำสำนักนายกรัฐมนตรี และได้ศึกษาค้นคว้าเกี่ยวกับวัฒนธรรมไทย ต่อมาเมื่อเป็นอธิบดีกรมศิลปากรแล้ว ท่านก็ค้นคว้าศึกษาเกี่ยวกับประเพณีไทยโดยอาศัยหลักวิชามานุษยวิทยา และได้แต่งหนังสือทางด้านนั้นไว้หลายเล่ม

ท่านเป็นคนที่ไม่เพียงแต่เฉลียวฉลาดเก่งกล่าสามารถเท่านั้น ยังเป็นคนขยันทำงาน ไม่ยอมหยุดอยู่กับที่และมีความตั้งใจแน่วแน่ที่จะสนับสนุนงานด้านค้นคว้าวิจัยเผยแพร่วิชาความรู้ในประเทศไทยและสนับสนุนลูกศิษย์ใหม่ความรู้กว้างหาทุกที่ทุกโอกาส ถึงแม้ว่าท่านจะเกิดมาเป็นลูกจีน ชีวิตของท่านเป็นชีวิตคนไทยแท้ที่สุดโดยตลอดคงจะเห็นได้จากผลงานของท่าน ในด้านการประพันธ์ก็ทั้งเกี่ยวกับศาสนา วรรณคดีไทย ประวัติศาสตร์ไทยและขนบธรรมเนียมประเพณีไทย เป็นธรรมชาติผลงานของท่านบางสาขาที่ยอมจะต้องหมกคายนาลงมือไปไม่เร็วก็ช้า แต่ผลงานเรื่องขนบธรรมเนียมประเพณีไทยจะคงยังยืนอยู่ตลอดกาลในวงการวิชาไทยวิทยา

เมื่อสมัยที่ข้าพเจ้าเป็นนิสิตพิเศษในคณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย ข้าพเจ้าเคยเรียนวิชาวรรณคดีเปรียบเทียบกับท่านศาสตราจารย์พระยาอนมานราชชนประมาณ ๑ ปี และถือว่าตนเองเป็นลูกศิษย์ของท่านคนหนึ่ง ข้าพเจ้ารู้สึกนิยมยกย่องในความสามารถของท่านและคุณค่าของงานในด้านวัฒนธรรมไทยที่ท่านได้ศึกษาค้นคว้าไว้เป็นอย่างดี ( สิงหาคม พ.ศ.๒๕๑๓ โทษิฮารุ โยชิโกว )

## 1. 生いたち

プレーヤーアヌマーラーチャトン博士（以下略して アヌマーンラーチャトンと称する<sup>(1)</sup>）は、1888年（仏暦2431年）12月14日（金）、バンコク市ヤーナーワー区ワット・プラヤークライの南側堀に沿った木造家屋で誕生した。近くには、ボルネオ会社の製材所があった。アヌマーンラーチャトンの父は当時そのボルネオ会社所属の製材所事務員をしていた。通勤に便利のように、父は会社近くに住んでいたのだった。アヌマーンラーチャトンの父はバンコク生れであったが、父方の祖父は、中国広東省豊順県出身の潮州人で、祖母はトンブリー県バーンジーカンのタイ人であった。したがって父はいわゆる僑生と呼ばれる二世華僑であった。母方の祖父も同じく潮州人、祖母はターチャーン・ワンルワン（王宮前棧橋）の近くに住むタイ人で、母も僑生であった。アヌマーンラーチャトン自身は潮州華僑の三世にあたるが、中国人とタイ人の血が等分に混っている。生まれた当時はまだ中国姓「李」を名乗り、名は中国人の「先生」が名付けた「光栄」を用い、タイ名はなかった。家族の者達は“Kuangyǒng”（光栄）と呼んだが、友人達は“Yǒng”（榮）としか呼ばぬため、後に関税局に勤務した時、ラーマ六世から受けた下賜名「サティエンコーセート」(Sthirakoses)<sup>(2)</sup>を姓とし、「ヨン・サティエンコーセート」と名乗った。父はトンブリーにある寺でタイ語を習って後、サムペンの華僑学校で中国語を習った。父は中国語が読み書きでき、潮州語が話せたが、アヌマーンラーチャトンになると、潮州語は聞いてわかるが、漢字の読解力はかなり怪しい。父は一時、弁髪をしていたことがあるが、アヌマーンラーチャトン自身も幼い頃には弁髪をつけていた。しかし、ある時、友人と喧嘩して、弁髪をつかまれ振りまわされたのがくやしく、即座に自分で切り捨ててしまった。バンコクに住む当時の華僑は、一般に弁髪をつけ、またつけることによって、タイ人に課せられた夫役義務を免れることができた。時には、夫役を逃れるため弁髪をつけたタイ人もいたという。一般には辛亥革命以後、弁髪風習が廃れた。父方の親類とは頻繁に交際していたが、母方の親類についてはほとんどなかった。父の妹の夫、アヌマーンチャトンの叔父も潮州人であった。ラーチャウオンで貿易商を営んでいた叔父の家へ、アヌマーンラーチャトンも時々遊びに行ったが、叔父は当時の華僑の常として、老後を中国で暮らすことを楽しみに考え、その妻である叔母を伴って帰国しようとしたが、叔母が反対したため、叔父は一人で帰国した。しかし、叔母の死後、その遺骨も中国に埋めたという。

アヌマーンラーチャトンが3〜4才の頃、ヤーナーワーの製材所近くの家から、サムペンのサパーン・ヤーイ・チャイ（チャイ婆さん橋）に移った。近くには賭博場や売春窟もあった。5〜6才の時、シープレーヤーに今もあるワット・マハープルッターラームの裏の通りに移転するが、一年後にサートーン南路がチャルンクルン路と交叉する所、現在のヤーナーワー区役所のある場所に移転した。その後、17才の時にサートーン南路からスリウォン路に移転した。ちょうど現在の Trocadero Hotel の真後ろであった。晩年はスリウォン路とシーロム路をつなぐデーチャー路、現在の Narai Hotel の後ろに往んだ。アヌマーンラーチャトンの歿後、バンコク市は氏を賛えて、デーチャー路からアヌマーンラーチャトン家に入る小路をアヌマーンラーチャトン通

りと改名した。

アヌマーンラーチャトンが生まれて以来、一生を送った場所は、いずこもバンコクの古くからある商業区であり、華僑の密集居住区であることがわかる。父の職業については転々として詳しくはわからないが、商業関係者であったことは推測がつく。中国姓名を名乗り、華僑社会に育ちながら、その後の一生は、最もタイ的な生活をしたタイ人であった。しかし、体内に流れる漢族とタイ族の血は、晩年遙かな太古の、タイ民族と漢民族の始源を問い、タイ語と中国語の深い繋がりを尋ねてその共通点を探ろうとするのだった。奇しくもアヌマーンラーチャトンの遺稿となったのは氏自身が主宰していた、タイ百科辞典の「中国」の項目約50頁であった。

## 2. 教 育

5～6才の頃、*‘パトム・コーカー’*を父から家庭で習い、暗誦させられた。*‘パトム・コーカー’*を習い終わると、父の所蔵するブラッドレーの印刷所出版の*‘チンダーマニー’*を持ち出して読み始めた<sup>(3)</sup>。9～10才の頃、トンプリーにあった、官立小学校、ローンリエン・バーンプラヤーナーナーに通った。当時としては、小学校はまだ数少なかった。そこでは、アメリカ留学を終えたばかりの後のプラヤーウィニットウィッタヤーコーン(コーン・アマータヤクン)が校長をしていた。氏はタイ国の学校教育振興に功労のあった人である。小学校では*‘ベーブリエンレオ’*巻1、巻2、を習い、英語も習った。11才の時、カトリック系の Assumption 学校に入学した。タイ語はプラヤーシーセントーンウォーハーン(ノーイ・アーチャーヤンクーン)の*‘ムーンラボット・バンパキット’*を用いた。当時、Assumption 学校は、中学課程一年から六年まであり、英語の授業は外国人教師が教えるのはもちろん、三年以上の担任はたいがい外国人教師があたり、英語の授業時間のみならず、他の学科、日常の会話にも英語を用いるため、相当の理解力が必要であったが、アヌマーンラーチャトンは既にほとんど理解できる能力を持っていた。アヌマーンラーチャトンは卒業を待たずして四年を終えると退学し、伯父の勧めで、官立薬事専門学校に入学した。しかし、家庭の経済状態が悪化<sup>(4)</sup>したため、二三月月通学しただけで中途退学した。アヌマーンラーチャトンの学歴はこれで終わる。

アヌマーンラーチャトンの父は、読書好きでまたかなりの蔵書家でもあった。アヌマーンラーチャトンが十代に「三国演義」や「西漢演義」「ナポレオン伝」を読んだのも父からその物語を聞いていたし、父が所蔵していたからだった。70年も前、ナポレオンを知っているタイ人は余程のインテリであったに違いないが、文盲の多い当時に、タイ語、中国語が読み書きでき、英語が少しできた父は、主に仏教関係の書物を好んで読む読書人であった。家庭での父の読書姿からの感化がアヌマーンラーチャトンのその後の人生に多大の影響を与えている。

官立薬事専門学校に通うかわら、夜は私塾で英語を習っていた。まず Assumption 学校を退職して英語塾を開いていたカデロ教師に習い、その後、Prince Prisdang の邸宅で、殿下から直々に習うことになった<sup>(5)</sup>。Prince Prisdang は、初代駐英タイ国大使を勤めていたが、ラーマ五世(1868～1910)の側近に居た貴族と不和を起し、免職させられてセイロンに渡り、そこ

で出家してしまった。ラーマ六世（1910～1925）の御代となって帰国を許され、帰国後は英語塾を開いたが、習いに通っていたのはアヌマーンラーチャトン一人だけで、毎夜八時頃からアヌマーンラーチャトンたった一人を相手に英作や英文解釈を教えていた。しかし、一カ月続いただけで、殿下が居を移し、蟄居してしまったために、それまでとなった。アヌマーンラーチャトンがタイ王族の知識人と接した最初の人であった。

### 3. 職 歴

アヌマーンラーチャトンが17才の時、家庭の事情で学校を中退し、オリエンタル・ホテルに勤務することになった。オリエンタル・ホテルは、当時バンコク唯一の洋式ホテルであった。タイ語で「ホーテン」、といえばオリエンタル・ホテルを指した。英語の上手なアヌマーンラーチャトンは、そこの受付係と昼と夜の料理名を英語で作成することを担当していた。オリエンタル・ホテルで勤務する従業員は、全て海南人であったことが、その中で一緒に働いていたアヌマーンラーチャトンに海南方言の知識を与え、後に中国語の方言に興味を持ち、言語学を独学で勉強した後、グルムの法則を応用できないものかと思いつくに至らせた。またホテル勤務中は、自由に厨房に出入りでき、出来上りの料理を好きなだけ食べることができた。メニュー作りと様々な料理に接するうちに食べ物の文化、由来に関心を抱き、後に『タイの習俗』シリーズの一節「タイ料理の由来」が生まれた。

オリエンタル・ホテルを一年たらず勤務した後、親類の者の縁故で関税局に勤務することになった。1905年、アヌマーンラーチャトンはまだ19才になったばかりであった。当時の関税局は、シンガポール、マラヤから移住してきた華僑、日本人、西洋人、インド人、マラヤ人等の外国人や英語の話せる混血児が多く、殊に輸入徴税課の係官のほとんどは、タイ語が読めも話せもできなかったという。英語が読み、書き、話せたアヌマーンラーチャトンは、当時のタイ人としては特殊技能者として稀少価値があったのだ。最初、輸出税課に籍を置いたが、勤勉さと、探究心の旺盛さで、次第にその才能が認められ、昇進も早かった。アヌマーンラーチャトンが任官した頃、タイ国政府の雇い外国人、英国関税局出身の Norman Maxwell が着任し、タイ国政府は Norman Maxwell に統計課の改革にあたらせた。Norman Maxwell は、早くもアヌマーンラーチャトンの才能に着目し、週一回、特別に英語を教え、宿題を出しては英語の理解力をつけた。ある時、バンコク駐在の英国人が開く演劇のリハーサルにアヌマーンラーチャトンを連れて行き、舞台上で話す上流階級の話す英語、下層階級の英語の違いまで理解させようとする熱心さであった。Norman Maxwell とは、アヌマーンラーチャトンが1932年革命で追放される直前まで、約20年以上もの間、職場を共にした。その間、Norman Maxwell から英国の言語、文学、歴史、慣習や世界史までも習い、アヌマーンラーチャトンのその後の生涯に多大の影響を与え、研究著述活動の基礎となった。また、当時、関税局の顧問であり、副局長を兼任していたのは、英国の関税局から派遣されていた William Nunn であった。1909年顧問付秘書官に昇格したアヌマーンラーチャトンは、William Nunn が帰国する1920年までの約10年間、直属の上司として仕え、仕

事上、事務処理方法、ファイルの用い方なども習ったが、“Elements of Politics”や“Civic”等、主に政治、法律に関する書を与えられ、難解な個所を尋ねては指導を受けた。William Nunn は Siam Society に論文を発表したり、また帰国後は、英国国会議員になった程の人物であった。アヌマーンラーチャトンの関税局時代は、この二人の英国人を師に、英語はもちろん、言語、文学、歴史、文化、政治、法律の該博な知識を吸収し、その上、この二人からは西洋的思考法、慣習の違いの大きさを否応なしに会得した。

1911年、顧問付秘書官に昇格した同年、23才の時に初めて勲位クン・アヌマーンラーチャトンの下賜を受けた。1913年、輸出税課課長代理、1920年、31才の時、収税課長、プラ・アヌマーンラーチャトン、1922年局長補佐、1924年にはプラヤー・アヌマーンラーチャトンの勲位を受けた。部内では異例の極めて早い昇進であり、行政官として如何に能吏であったかを伺わせてくれる。1930年頃には、省内でアヌマーンラーチャトンを大蔵省次官にという声も既に一部にあって、その行政手腕が高く評価されていた。しかし、1932年に起った民主革命の余波は、関税局をも洗い、1933年5月1日、アヌマーンラーチャトンは関税局から追放された。在職年数28年、46才の時であった。突然の追放は、アヌマーンラーチャトンにとり青天の霹靂に似て、晩年、もしその時追放にならなければ、そのまま関税局に勤務して生涯を終えていただろうと述懐している。事実、関税局時代に、勤務の傍ら余暇を執筆活動にあて、かなりの著作もあり、評判を得て、その分野でも知られるようになり、ダムロン親王からワチラヤーン図書館に勤めるよう招請があったにもかかわらず、断ったため、ダムロン親王の逆鱗に触れることがあった。関税局時代の豊富な経験を生かし、資料、文献の裏付によって芸術局に移って後、書いた『タムナーン・スラカーコーン(税関の由来)』は、タイの商業、交易史の教科書として、タイの経済、商業系の大学で用いられている。

民主革命のあった1932年、アヌマーンラーチャトンは、70名の国民代表議会の内の臨時代議員に任命されている。

追放された後は、週に一回、土曜日に開かれる王立学士院の国語辞典編纂委員会に出席するのが唯一の仕事であった。それも手弁当で、車代が2 バーツ支給されるだけであった。追放されたある日、シーロム路を歩いていると、当時、芸術局長をしていたルワンウィットワータカーン<sup>(8)</sup>と出会い、芸術局の学芸部長に就任するよう要請を受けると、その場で受諾した。ルワンウィットワータカーンとアヌマーンラーチャトンとは、1827～8年頃設立された文学クラブ<sup>(9)</sup>のメンバーであった。また芸術局は1933年5月に設置され、ルワンウィットワータカーンがその初代局長に就任していた。当初の芸術局は、1.学芸部 2.美術部 3.建築部 4.博物及び遺物部 5.図書館部 6.秘書室があった。学芸部は更に、1.文学課 2.考古学課 3.劇及び楽団課 4.弁論課に分かれ、プラピニットワンナカーン(セーン・サーリトゥン)が、文芸部長をしていたが、病氣勝ちのため辞職してしまった。考古学者ルワンボーリバーンブリーパンの強い推薦もあって、1935年アヌマーンラーチャトンは文芸部長に就任した。就任した当時の主な仕事は、弁論大会を開いて優秀な弁論家を育てることであったが、弁論を競うあまり相手を言い負かすために理論も筋もなく、また政府や個人攻撃をしたため、取締が厳重になり、遂には廃れてしまった。

それと同時に芸術局の部課も改組され、弁論部は廃組、学芸部、図書館部が合併され文学部となり、1. 中央課 2. ワチラーウット図書館課 3. ワチラーン図書館課 4. 中央図書館に分けられた。アヌマーンラーチャトンは引き続き文学部長に就いた。文学部の主な仕事は、文献資料の整理、研究調査、出版普及活動であった。その成果としてアヌマーンラーチャトンの「古代インドシナ半島」「タイ族誌」が出版された。また部外における活動も著しく、1934年からチュラーロンコーン大学文学部非常勤講師として、タイ国で初めて言語学を教えた。

1939年11月、芸術局副局長に任命された。当時の首相ピブーン ソンクラーム元帥は、タイ文化昂揚運動を政策の一つに掲げ、優秀なブレインを膝元に置いておきたいため、アヌマーンラーチャトンを総理府付の専門家として招聘した。その後、第二次世界大戦に入り、芸術局長ルワンウィットトワータカーンは外務大臣となって転出し、文化情報局長をしていたパイロート・チャヤナムが、一時芸術局長を兼任するが、1942年8月10日に、アヌマーンラーチャトンが局長に任命された。既に53才を過ぎていたが、局長に就任してからの活動は目覚しく、従来、局の管轄下にあった美術学校を美術大学に昇格させることに成功し、アヌマーンラーチャトンが初代学長を兼務した。また、学問の振興、知識の普及、後進の養成を常に念頭に置いて研究、著作活動を行っていたアヌマーンラーチャトンは、1848年7月以来季刊、「芸術雑誌」を発刊し、自ら編集主幹、執筆者となった<sup>40)</sup>。主にタイの文学、歴史学、考古学、美術、音楽、民俗学にわたるタイ人学者の論文を掲載し、高い水準を保った学術雑誌として今日に至っている。また、外国人に対するタイ文化紹介を目的とした“Thailand Culture Series”と呼ぶ小冊子のシリーズを逐次出版し、自らも執筆を担当、17冊中8冊はアヌマーンラーチャトンに依る原稿であった。アヌマーンラーチャトン定年退職後、新たに“Thai Culture New Series”となって引き継がれ、現在では既に25冊まで出版されている。当時、官吏の定年は55才であったから、アヌマーンラーチャトンは1944年には退職せねばならない筈であったが、その後、一年毎に延長され、結局、1948年12月4日、60才で芸術局を勇退した。

定年退職した後も、公的役職はむしろ増えるほどであった。芸術局時代、既にタイ国王立学士院会員であったが、王立学士院会長となり、王立学士院が主宰する国語辞典編纂委員会委員長、タイ国地理辞典作成委員会委員長、外国語のタイ訳語制定委員会委員長、タイ百科辞典編集委員会委員長、また他の公的機関では、歴史、文化、考古学文献刊行委員会委員長、タイ歴史編纂委員会副委員長、総理府国家研究調査院運営委員等を逝去するまで続けていた。1947年の一時期、上院議員に選出されている。

#### 4. 人物交流

アヌマーンラーチャトンが関税局に勤務しだして間もなく、同僚が読む英国の雑誌“Police News”を借りて読んだのがきっかけとなり、自らも洋書店を通じて購読するようになった。その後、“Tit Bit”を購読し、その中で面白かった「神父の鬚」と「汽車物語」を訳したところ、出版社を兼ねてタイ印刷所を経営するクンソーピットアックソーンカーン(ヘー・ローンピムタイ)

の目にとまり、出版されたのが、最初の訳書であった。クンソーピットは、植字、印刷、校正全て自ら指導担当し、当時、タイ国でなしうる最高の印刷技術を駆使しようとし、自分の所で印刷する書物も、主に国立図書館に残存する写本を印刷出版して普及することに努め、世にタイ印刷所本と呼ばれる刊本を次々に出版していた。アヌマーンラーチャトン<sup>(11)</sup>は、クンソーピットを通じて、プラサーンプラスート（トリー・ナーカプラティープ）、ピッタヤーロンコーン殿下<sup>(12)</sup>、ダムロン親王<sup>(13)</sup>等、当時のタイを代表する学者と面識を得ることができたばかりか、時には、金がなくて洋書が買えない時、書籍購入の資金援助まで受けた。また、クンソーピットが、わざわざ外国に注文を出して取り寄せたり、帰国する Dr. O. Frankfurter からインド学に関する蔵書を買取ったりして文献を集めてくれた。

ナーカプラティープとの出会いは、アヌマーンラーチャトンが28才の時、“The Hitopadesha”の英訳本を見つけて読んだ後、感銘を受け、クンソーピットの勧めもあり、訳出を試みるが、梵巴語の知識を必要とすることから、クンソーピットの紹介で、当時、ワット・テープシリンで出家していたプラサーンプラスート（出家名）と初めて会った。アヌマーンラーチャトンはパーリ語を学びとるつもりで、また、プラサーンプラスートは英語をアヌマーンラーチャトンから学ぶつもりで、共同で翻訳を始めた。まず、アヌマーンラーチャトンがタイ語に訳し、プラサーンプラスートがそのタイ語を書き改めていった。1915年、クンソーピットのタイ印刷所から出版されると、反響は大きく、当時の知識人の間で名訳とうたわれ、この書で、アヌマーンラーチャトン（当時はサティエンコーセート）とナーカプラティープの名は世間に知られるようになった。その後、ナーカプラティープとは、<sup>\*</sup>トッサモントリー、<sup>\*</sup>ニヤーイ・ベンカリー、<sup>\*</sup>カーマニット、<sup>\*</sup>ラッティ・コーン・プアン、等、多くは仏教、インド文化に関する名著名訳を次々と生み出した。しかし、プラサーンプラスートが還俗してトリー・ナーカプラティープとなり、国防省教科書局付教官に任官してからは、互いに公務に忙しくなったことと、また、アヌマーンラーチャトンは己れの個性を生かした表現を尊重したいという立場から、共訳、共著は不可能となった。その後、ナーカプラティープは、梵巴語の語学力を買われ、ラーマ六世の側近く仕え、ラーマ六世の御作の相談役となった。ナーカプラティープはパーリ語辞典を残している。

“The Hitopadesha”の翻訳出版をきっかけに、クンソーピットの案内で、まず会ったのがチャオプラヤーパートコーラウォン（ポーン・ブンナーク）であった。数回会ったが、会う毎に有益な示唆を受けた。また、クンソーピットの導きでチャンタブリー殿下に会うことができた。殿下は当時、大蔵大臣であり、関税局の小役人ではとても会えない身分の人であった。同じ頃、やはりクンソーピットの案内で、ワチラヤーン図書館にダムロン親王を訪ねた。以来、ワチラヤーン図書館にしばしば出入りするようになり、碑文解説中の G. Coedès にも教えを乞うことができた。クンソーピットは、当時の貴族学者の著作出版を一手に引き受けていたので面識は広がった。

ちょうど、アヌマーンラーチャトンが局長補佐となる話が持ち上がった時、同時にダムロン親王からも王立学士院の秘書が空席になっているので、秘書に就くよう要請があった。せっかくの要請をアヌマーンラーチャトンは断わったため、長い間、ダムロン親王に会わないよう避けねば



ならなかった。

1914年、ダムロン親王を会長に仰ぐ文学クラブが、法に基づき設立された。文学クラブはまずクローン・リリットの最高傑作として『プラロー』、クローン・チャンの最高傑作として『サムットコート』、クローン・カープの最高傑作として『マハーチャート・カムテート』、クローン・スパープの最高傑作として『クンチャー・クンペン』、クローン・ラコンローンの最高傑作として『イナオ』、ボット・ラコンプートの最高傑作として『ホワチャイ・ナクロップ』、クワームリヤン・ルアンニターンの最高傑作として『サームコック』、クワームリヤン・ルアンアティバーイの最高傑作として『プララーチャピティ・シップソーンドゥアン』を選んだが、その数年後、アヌマーンラーチャトン、ナーカプラティープ共訳の『ニヤーイ・ベンカリー』を優秀作品として表彰した。1927～8年頃、まだ関税局に勤務していたアヌマーンラーチャトンも、この文学クラブのメンバーとして加入を許された。毎土曜日、王立学士院で会合が開かれた。その頃の会員の顔ぶれは、王立学士院、文部省、図書館関係者では、ダムロン親王を初め、ピットヤーロンコーン殿下、プーンピッサマイ・ディサクン<sup>(14)</sup>、チャオプラヤータンマサックモントリ<sup>(15)</sup>、プラチェンチンアクソーン<sup>(16)</sup>、プラピニットワンナカーン、プララーチャタンマニテート、バラモン僧サーストリ、部外からは、プラヤーウパキットシンラパサーン（ニム・カーンチャナーチャーワ）、プラタンマニテートタワイハーン（ユー・ウドムシン）、プラウォーラウェートピシット（セン・シワサリヤーノン）、プラサーンプラスート（トリー・ナーカプラティープ）、ルワンテプダルナースディット（タウィー・タンマタット）及びアヌマーンラーチャトンであった。このメンバーが、最初のタイ国語辞典の編纂委員会でもあった。文学クラブの会合の成果は、『バントック・ワンナカディー・サマーコム』と呼ぶ機関誌に掲載された。その後、ダムロン親王より、文学クラブを文芸協会に改組したいとの提案があり、ピットヤーロンコーン殿下、チャオプラヤータンマサックモントリ及びアヌマーンラーチャトンがその設立委員となり、後にルワンウィチットワータカーンが参加した。しかし、1932年民主革命勃発と共にこの仕事も頓座せざるを得なかった。

民主革命後、新政府が誕生した時、タイ言語文化振興委員会が設立され、アヌマーンラーチャトンはその副委員長に任命された。1958年、タイ国で初めて設立された International—P. E. N.—Thailand Centre（タイ国ペンクラブ）の初代会長として、創設に尽力したアヌマーンラーチャトンが選ばれた。その他、タイ国インド学会委員長、1967年にはアユタヤー王朝記念祭の委員長、死亡する1969年には、Siam Society の会長に選出されたばかりであった。

チュラーロンコーン大学で初めて言語学の講義を行なったことは先に述べたが、後進の指導を使命とするアヌマーンラーチャトンは、死亡するまで、チュラーロンコーン大学、文学部、教育学部、政治学部、タンマサート大学、プラサーンミット教育大学で、言語学、タイ民俗学、比較文学、比較宗教学を講義し、チュラーロンコーン大学からは名誉博士号、創立に尽力した芸術大学からは芸術博士号が贈られた。

アヌマーンラーチャトンの著書出版から生まれた利益を若い学徒にと、1957年アヌマーンラー

チャトン奨学金が設けられ、タイ文化研究に尽す学徒に与えられた。また、アヌマーンラーチャトンの弟子達によって、広く芸術著作活動を行なう者への便宜と、タイの芸術著作活動を援助するためのサティエンコーセート基金が、氏の80才を記念して設けられた。1968年12月14日、アヌマーンラーチャトンは、80才誕生日を記念して、所蔵の図書を国立図書館に寄贈し、図書館三階にアヌマーンチャトン文庫が生まれた。

普段から健康を心がけ、早朝の散歩を日課としていたアヌマーンラーチャトンは、生涯一回も入院したことがなかったが、脳内出血のため初めて入院したシリラート病院で、1969年7月1日、遂に不帰の人となった。享年80才6ヵ月15日であった。

## 5. むすび

華僑三世として、バンコクでは極くありふれた庶民の家庭で育ったアヌマーンラーチャトンが、満足な高等教育を受けることもなく、生涯の半分を関税局官吏として過ごし、本格的な研究著作活動に従事したのは四十代も中端を過ぎてからであった。鋭い洞察力素晴らしい記憶力を持つ天分に恵まれていたとはいえ、人生の後半からの研究著作活動を支えていたのは、常に旺盛な探究心、知識欲と共にタイにおける学問の興隆を目指す使命感と、死に至るまでただの一回も入院したことのない健康の維持であったに違いない。

アヌマーンラーチャトンの青年時代は、父の所蔵する仏教書から、宗教への関心を探め、教会の牧師と信仰論争をしたりもするが、次第に仏教を生みだした文化的背景、インド文明へ興味が傾いてゆく。それはまた、後にタイ文化を育んだ文化の根源への探究へと連なって行く。関税局時代は、むしろ翻訳を主とし、自ら研究調査することはなかったが、他の世界を知り、該博な知識を吸収する時期であった。芸術局に勤務し出してから、タイ歴史を本格的に研究するが、その後、タイ語、中国語に関する言語学的関心を持つに至り、チュラーロンコーン大学での言語学の講義を引き受け、後に、『ニルカティサート』としてその講義録が出版された。その後、第二次世界大戦当時の文化政策で、文化会議の委員を引受け、総理府に出向して文化について研究することを義務づけられているうちに文化人類学、民族学に興味に移り、特にタイの民俗を研究調査するようになった。関心の幅広さに従い、その著作も幅広く、宗教、言語、文学、歴史、民俗に大別できるが、就中、タイの生活文化を深く観察し、キメ細かく記録したタイ民俗に関する著書は、優れて後世に伝えられる文献として挙げられよう。宗教、言語、文学、歴史に関する著書は、多くは知識の普及を目的とする啓蒙的要素が強く、既にアヌマーンラーチャトンを抜く著書もありアヌマーンラーチャトンの薫陶を受けた弟子の中から、師を凌ぐ論文を発表し、学界で活躍する研究者もあらわれた。播いた種は立派に成長し、花を咲かせつつあるのだ。しかし、急激に変質しようとするタイ社会の中で、アヌマーンラーチャトンが書き残した伝統的タイの生活文化の姿は、再び描くことはもはや不可能ではあるまいか。

アヌマーンラーチャトンは、学問の興隆、知識の普及、後進の指導の自分の課すべき役割と考え、生涯を終えるまで、積極的に講義や執筆活動を行なって、やめないばかりか、その死後を見

越して、自分の全蔵書を公共に供し、自分の著作からあがる利益を研究者の資とした。筆者自身  
チュラーロンコーン大学留学中アヌマーンラーチャトンの比較文学の講義を一年間近く聴講し、  
今も、嗅ぎ薬を左手に、淡々と講義し続ける老学者の姿をなつかしく思い出すが、なおタイを深  
く学ぶ時、その業績から受けるはかり知れない恩恵に、アヌマーンラーチャトンの偉大さを知る。

## 註

- (1) 出生時はクウォンヨン・セーリー。関税局時代はヨン・サティエンコーセート。
- (2) アヌマーンラーチャトンと改姓した後はペンネームとして用いた。
- (3) Dan Beach Bradley 博士、宣教師として来泰、1839年タイ国で最初に印刷所を開設した。
- (4) オーソットサーラーラッタバーン。現在のマハーウィタヤーライ・パートサート・シリラートの前身。
- (5) プラウォーラウォンタエープラウオンチャオ・プリットサダーン。
- (6) ＊チーン・バーバー、と呼ぶ。一般にシンガポール、マラヤから渡来した華僑は回教徒が多いが、回教徒でなくても豚肉を食べないのが特徴。
- (7) 1881年ラーマ五世を始め、ラーマ四世の王子達の寄金によって設立された。＊ワチラヤーン、はラーマ四世の出家時の僧名。1905年、バンコク図書館に吸収され、今日の国立図書館となる。1926年この図書館の運営委員会がラーチャバンディットサパーへと発展する。
- (8) (1898～1962) 外交官出身。1934～1941年まで芸術局長。1941年外務副大臣。1942年外務大臣。1943年駐日大使、終戦後戦犯となり入獄。1951年大蔵大臣、1952年経済大臣、1952年以来インド大使を振り出しに再び外交官となる。1958年定年となるも1959年サリット・タナラット首相の要請で革命政府総理府副長官となる。宗教、歴史、経済、政治、芸術にわたる著書が多いが、就中、戯曲、創作は膨大な数にのぼる。
- (9) ワンナカディー・サモーン。
- (10) 最初は＊ワーラサーン・シンラパーコーン、1957年より＊シンラパーコーン、となり、隔月刊誌として今日に至る。
- (11) ノー・モー・ソーのペンネームで多くの詩や説話の作品を残す。
- (12) (1862～1843) ラーマ四世の五十七番目の王子。「タイ国歴史学の父」と仰がれ、タイの歴史、文学に関する著作が多数ある。文部大臣、内務大臣等の要職にあってタイ国の近代化に尽す。1962年生誕百年を記念して、UNESCO の世界の偉人に挙げられた。
- (13) (1863～1947) ラーマ四世の第六十二番目の王子。ダムロン親王とは異母兄弟。ダムロン親王と同じ頃、建設大臣、大蔵大臣、国防大臣等の要職にあって近代化に尽した。美術家として多くの傑作を残す。また＊サーンソムデット、＊バントウック・ルアン・クワームルーターンターン、を始め著書も多い。1963年、生誕百年を設念して、UNESCO の世界の偉人に挙げられた。タイ人としてダムロン親王と二人のみ。
- (14) モームチャオジン・ブーンピッサマイディサクン。ダムロン親王の娘。現在も著述家、宗教家として活躍。
- (15) 当時の文部大臣。
- (16) 中国史研究家。中国語文献よりタイ語に訳した訳書は＊プラチュムボンサーワダーン(歴史史料集)、に収められている。
- (17) 国語学者。＊タイ語基礎、がある。
- (18) 国語国文学者。＊タイ語基礎、の他、古典文学研究書がある。

## 参考文献

- (1) ชนิต อัยโพธิ์ "พระยาอนุนานราชชน เมื่อรับราชการในกรมศิลปากร" สังคมศาสตร์ปริทัศน์ ฉบับพิเศษ, สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕๑๒
- (2) นิลวรรณ ปิ่นทอง "นายกก่อตั้งสมาคมภาษาและหนังสือ" สังคมศาสตร์ปริทัศน์ ฉบับพิเศษ, สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕๑๒
- (3) ประพัฒน์ ตรีนรงค์ ชีวิตและงานของเสด็จยวโกเศศ, แพรพิทยา, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕๐๖
- (4) ส. ศิวรักษ์ สัมภาษณ์เสด็จยวโกเศศ, มุลนิธิเสด็จยวโกเศศ, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕๑๒
- (5) อนุนานราชชน, พระยา อัตชีวประวัติ พระยาอนุนานราชชน, หนังสือแจกในงานพระราชทานเพลิงศพพระยาอนุนานราชชน, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕๑๒
- (6) อนุนานราชชน, พระยา พื้นความหลัง เล่ม ๑, ๒, ๓, คีกนิศสยาม, กรุงเทพฯ, พ.ศ. ๒๕-๑๐, ๒๕๑๑, ๒๕๑๒
- (7) Karuna Kusalasaya & Ruengurai Kusalasaya "Phya Anunan and Indology" *In Memoriam PHYA ANUMAN RAJADHON*, The Siam Society Bangkok, 1970
- (8) Sulak Sivaraksa "Phya Anuman : Common Man or Genius" *In Memoriam PHYA ANUMAN RAJADHON*, The Siam Society, Bangkok, 1970